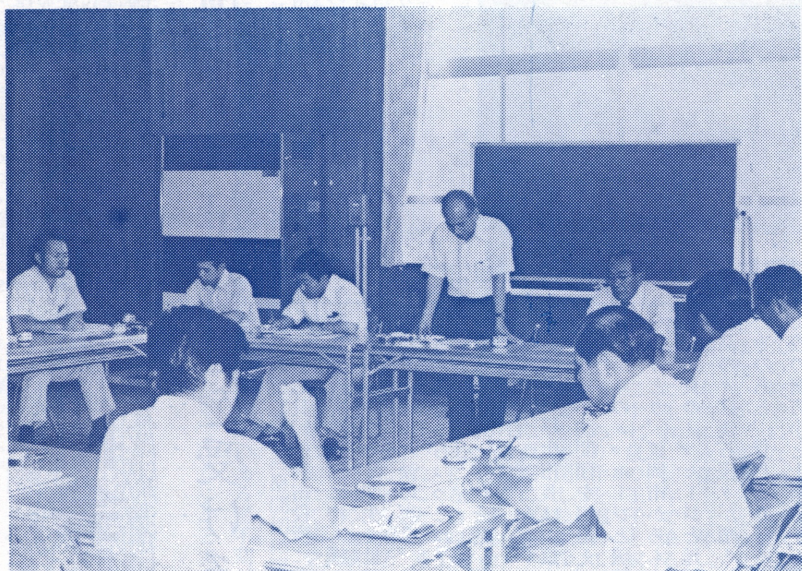


総合公園(仮称)を計画



町制施行記念事業推進委員の委嘱式、町役場 7月18日

＜町制施行＞

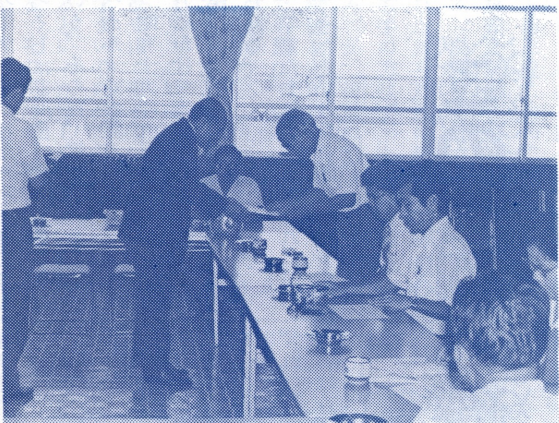
記念事業推進委員会が発足

町では予ねてから町制施行を記念して約十平方分の総合公園(仮称)の建設を計画していたが、七月十八日に町役場でその推進委員十五名に対し委嘱状が交付された。委員には役場、議会、各種団体からそれぞれ五人の代表が選ばれ、委員長に親泊輝武氏(町議会議長)、副委員長に平安恒政氏(助役)が互選された。

総合公園は町民の休息、散歩、運動などに利用するためのもので、四百坪トラック(多目的広場)、体育館、テニスコート、プール、芝生広場、緑の遊歩道などが計画される。

総事業費は約二十一億一千万円で、四五%が国の補助、残り五五%が町負担となる。

推進委員会では、今年いっぱい



町歌制定委員の委嘱式、町役場 7月24日

町歌・町音頭制定に着手

予ねてから町民の間から町歌及び町音頭の制定が叫ばれていたが、町では七月二十四日町役場でその委嘱状が交付され、町歌制定委員が発足した。

席上で委員長に仲宗根英輝氏(教育委員長)、副委員長に平安恒政氏(助役)が選ばれ今後の委員会活動に当たることになった。

これは町制施行を記念して行なわれる事業の一環である。

のびゆく西原を象徴するりっぱな町歌・町音頭が制定されるよう期待したい。

尚、委員の方々は次の通り。

- 〔議会〕一名 屋良朝光(議員)
- 〔教育委員会〕一名 翁長正貞(企画課長)

に用地の選定、規模、利用計画を町に答申する予定である。

この事業は五十五年から五十九年の五ヶ年計画で行なわれ、完成は五十九年になる。

昭和54年度定期総会開く

与那原地区防犯協会

与那原地区防犯協会では、七月二十日午後三時から本町の中央公民館で関係者百人を集め昭和五十四年度定期総会を開いた。

昭和五十三年度事業報告、五十三年度決算報告及び承認、五十四年度事業計画、五十四年度予算案などが審議されたがすべて承認。

議案審議のあと、防犯功労者及び団体の表彰式が行なわれ、本町から宇小那覇三〇四番地の外間惟正さん(41才)が少年補導員としての功労が認められ表彰を受けた。



与那原地区防犯協会総会

受講生募集

町教育委員会では、婦人学級、九月開講予定の老人学級、青年教室、幼児教育講座、話し方教室、生花教室、料理教室、和裁教室、書道教室、絵画教室など受講生の募集を行っています。

ご希望の方は、直接又は郵便で九月三日までに中央公民館の教育委員会へ申し込んで下さい。

尚、定員に達し次第受付を締切ります。

香典返し

字棚原17番地の宮城賢一さん(48才)が八月十日町長室を訪ずれ、父・宮城太郎さん(90才)の香典返しとして町社会福祉協議会へ十萬円の寄付がありましたのでこの紙面をかりて感謝申し上げます。

疎開学童、延岡で涙の再会

級友、恩師らに大歓迎を受ける

第二次大戦中、宮崎県延岡市南方(みなみかた)地区(当時南方村)に疎開していた本町の集団学童疎開とその家族ら合せて七十六人が、七月二十七日から二十八日にかけて南方小と上南方小を訪問し、南方地区の人々、級友、恩師などから大歓迎を受けた。



青年学校があった高野町で盛大な歓迎会が催される

二十七日、延岡市役所に着いた訪問団は、玄関前に待ち構えていた当時の仲間や疎開先で世話になった人、先生と涙の再会。

『元気にしちゃったね?』『みんな大きくなって』と思ひ思いの言葉をかけ合った。

その日、早生市長は上京中で、後藤助役が訪問団を出迎え、宮平町長からのメッセージと琉球人形を受けとり、延岡市からも本町に早生市長のメッセージと延岡市特産品の紅溪石硯が贈られた。

そのあと、貸し切りバス二台で母校の南方小と上南方小へ向い、感無量の思いで懐かしい昔をしのんだ。また、母校では、かつての級友たちに暖かく迎えられ、互いに酒をくみかわして再会を喜びあった。

南方小へ向った一行が上南方小で合流したあと、高野町の当時の青年学校を訪ずれ、当時の学童生活懐かしくふり返った。

二十八日は、午前十一時から午後二時にかけて高野町主催の歓迎

親泊議長南米へ立つ

ボリビアとペルーで移住記念式典

昨年のブラジル移住七十周年に続き、ことはボリビアの沖と共に空路南米へ出発した。親泊議長が八月五日町村

ボリビア(サンタクルース、四日間)、ペルー(リマ、三日間)アメリカ(ロスアンゼルス、一日間)、カナダ(バンクーバー一日間)で八月二十七日に帰国予定である。

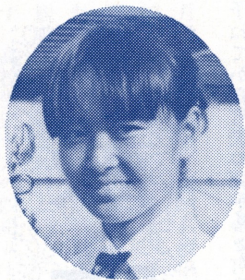
十五日にボリビア移住二十五周年記念式典、十九日にはペルー移住八十周年記念式典に参加する。また、各国で本町出身者との懇談会も催され、交流を深めてくる。

パーティーが行なわれ、町民の心づくしに訪問団は大変感激したという。その夜、第三回「まつり」のおおかを参観した。

昭和十九年九月から二十一年九月にかけて本町から宮崎県に集団疎開した学童は、約百六十名と云われる。

この悲劇を繰り返さぬために

新川 美千代



お願い：顔をそむけないで深く考えて下さい。あなたが、私になる可能性はまだ消えていないのです。私は微笑を奪われた少女、私の髪を返して、私の少女を返して。

この詩は、人生で一番美しく、未来に夢を抱いた少女が、武力と権力で青春を踏みじられ、微笑と黒髪を奪われた悲しみの叫びなのです。

時はすべてを洗い流すと言います。しかし戦争の悲しみは本当に消え去ったのでしょうか。「父を返せ!母を返せ!子供達を返せ!私につながる人々を返せ!」という叫び声は、沖繩の至る所から聞こえるのではないのでしょうか。

悲惨な戦争から35年、人々は華やかさと豊かさの中で、あの悲惨な体験を記憶の彼方へ押しやったかに見えます。が、この地には確

情の悪いことなどもあって落ち着いて勉強もできなかったようだが地域民との共同生活は各地で友情が芽ばえ、終戦後も交流がつづいた。

昭和五十年に本町から二十五人の訪問者が宮崎県北方町(旧北方村・北方小学校)に戦後初めて訪ずれ、昭和五十二年にも十人、南方へは今回がはじめてである。

本町から延岡市南方地区と北方町に五チームの学童疎開団が編成され、約三十五人の児童に対し一人の引率教諭がついたという。また、訪問団は帰路についた翌日、仲宗根英輝先生(当時引率教諭)や小川正元教育長(当時南方小学校)ら六名が団を代表して町長室を訪れ、宮平町長と平安助役に出会ひ、訪問先の様子を報告すると

おばさんが、優しく世話をしてくれ、無事2人は母の待つ沖繩へ帰って来ました。ところが、真先に迎えに来るはずの母の姿はなく、賑やかな出迎えをよそに、幼い父達は取り残され、人づてに母の死を知り、陽の暮れかかった校庭で、兄と2人抱き合って泣いたということです。

「過去の悲劇など忘れてしまえ。」という若い人もいます。「まさか日本が戦争なんかするわけはない。」と語る大人にも会いました。確かに悲しいことは、忘れるに、心の中で深く考えて下さい。

「あなたが私になる可能性はまだ消えていないのです。」と、叫ぶ声が聞こえます。

事実、私達はこの少女の叫ぶ姿をここ数年世界各地で見えています。戦乱の続く中東やアフリカ地域で、更にベトナム、カンボジアで。その陰で無数のいたいけない幼児が、のどの渇きを訴え、飢えの苦しみをさまよっていることを忘れてはいけません。この子供達に愛の手を差し伸べ

ともに延岡市の早生市長からのメッセージと、贈物の紅溪石スズリを手渡した。代表は、延岡市と本町との交流のきづなが深くなることを訴えた。

「もう二度とあのような悲惨な学童疎開を出してもらいたくない。」というのが訪問団の切実な願いであらう。

幸い今年、国際児童年、「我が子の愛を世界の子供に」というスローガンのもとにキャンペーンが繰り広げられています。

身も心も育ち盛りにある、この子供達の飢えを除き、心の傷を癒し、子供の明日に大きな希望を与えてやることは、平和な社会に生きる人々の義務だと思います。

しかし、それだけでは勿論、十分ではありません。青春を奪われた少女や、母を殺され廃虚をさまよった父達、そして今なお飢えに苦しむ難民の悲劇をこの日本に、いや世界に繰り返してはなりません。

新川 美千代

西原高等学校二年生、字兼久三三番地の出身。全沖繩高校弁論大会で「この悲劇を繰り返さぬために」と題して熱弁をふるい、最優秀賞を受賞。十一月に行なわれる全国大会へ参加する。同校生徒会の広報部長として手腕を振っている。

西原町における 尚円王とその伝説

(三)

西原町字与那城二四八の二 仲田 朝宗

幻の御茶当真五郎

内間 高千瀬

墓を越えて、しばらく行くとゴルフ場がある。ゴルフ場を過ぎると池田部落にさしかかる。部落の喜屋武家の前から、弁が岳に通ずる坂道が戦前まであったそうだが、その坂道がいわゆるトウフ小ピラである。

尚円王金丸が、尚徳王の逆鱗にふれて、内間に隠遁したところ、御茶当真五郎に提灯をもたせて、足下をたらしながら、夜な夜な首里に通ったという坂道である。

真五郎については、それぐらいの伝説しかないが、古老の話によると、西原町では折目、節日を首里、那覇より一日早くとりおこなうということだが、その理由は、その日は真五郎の霊が首里に上るから御馳走が腐るので、一日早く折目、節日をやるのだということである。事実、西原町では現在でも折目節日は、よその市町村より一日早い習慣がある。

尚円革命の立役者だった真五郎も、何故か歴史にその名をとどめることなく、時は去った。

当時歴史にその名をとどめたのが、「もの呉ゆしどわあ御主」と唱えた安里大親ただ一人である。だから、ある人は真五郎を架空の人物といい、ある人は実在する人物という。

そのような郷土の英雄を、幻から「映像」に復元するのも、現在に生きる吾々の責務ではなからうか。

多く語らない歴史

「中山世鑑」によると、「首里ニ上リテ、越来王子尚泰久ノ家人トゾ成リ給フ」とある。

金丸がどのような経緯から、尚泰久の家にあったのかは、定かではないが、尚泰久と金丸は、不思議にも共に永楽十三年（一四一五年）に生れ、同年である。だから同じ二十七歳の王子と家臣は、ここががっちり手を握って、波瀾多い琉球史を展開した訳である。

このように西原に点在するいろいろの伝説から類推すると、尚円は尚泰久の家にあった以前から西原に居住していたことが考えられる。そして、とんとん拍子に出世して西原間切内間村の地頭となり尚徳王の逆鱗にふれて鎮之側を退めたので、再び西原間切に隠遁し、今の内間御殿のある嘉手刈村の地に住したのではないかと考えられる。

内間 御殿

国道三二九号線はこれまでこそ、四車線の広いアスファルト道路であるが、王朝時代は農道だった。その昔は山原路への本街道はもと海岸線に沿っていて、現在の小那覇公民館前の道路がそうであって、風雅な街道であった。昔を忍びながら周囲の景色に目をやると右手の方はずっと山脈（やまなみ）が、街道に沿ってならかな陵線をえがいて、高く低くどこまでも延びている。

現在の三二九号線の沿線にそって嘉手刈という部落がある。古代よりこの地に刻まれたさまざまな歴史は、落ち着いた家並みのたたずまいのなかに静かに息づいていて、といった感じの古い部落である。その部落の一角に内間御殿がある。

尚円が閏々の日々を八カ月もの長い間過したところである。そこは道に沿って石垣が積まれ、その入口に樹齢四百五十年を経たといわれるサワフジの木が何かを語りたげに、青空を破らんばかりに真っ直ぐに屹立している。

内間御殿から西側、三二九号線をへだてたところに小高い森がある。その中央部に拝所が二つあるが、その左側は尚円がいつも故郷伊是名に向って、朝晩遙拝したところだと言われている。

周囲には名も知らぬ雑木がまがりくねってお互に体を寄せあつてからみあい、ススキの葉がところせましと茂って、昼でもうす暗くひんやりした空気がただよっている。

——内間御殿は、いまでも中山家の人びとが掃除をしているので庭はきれいに手入れが行き届いて雑草のはびこる余地のないほどきれいである。

歴史とは、時が経つとともに、紆余曲折、二転、三転してその痕跡さえとどめないのに、なぜか尚円王の伝説だけは、西原の地にいつまでも誰からもなく、語り継がれている。

古代のことは茫々としてわからない。人間にとって、明日のことさえ計り知ることができないのである。

紀元前西原の地に初めて人類が生活するようになってから、いったいどのくらいの年月を経たのだろうか。

南の島のジンジャントロプスが道具や火を用い、人類文化の第一歩を始めてから今日までも、ほぼ百万年を経ているのである。

この気の遠くなるほど長い間、私たちの先祖はこの西原の地を愛し、いつくしんできたのである。その土地の歴史を調べるのも、私たちの責務のような気がする。

(おわり)

町内各地で綱引き終る 伝統を保存し連帯感を深める

本町各地恒例の綱引きが七月二日には、幸地、津花波、内間、嘉手十一日小橋川で、翌日の二十二日一刈小波津などで、八月五日にも我



350~400年の伝統を誇る我謝綱引き (写真提供・福治義和氏)

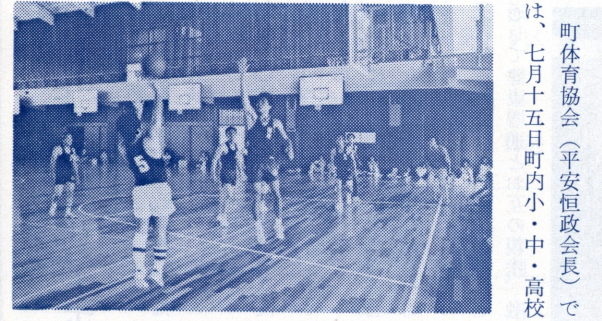
謝で行なわれたいに賑わった。

盛夏の中のこの祭りは、郷土の伝統を継続発展させるとともに部落民の交流あるいは、連帯感を深めるのに大きく役立った。

……

排・籠球、男女とも六区が優勝

卓球は十区が優勝



町体育協会(平安恒政会長)で、七月十五日町内小・中・高校の三会場で開催された昭和五十四年度の排・籠・卓球大会を開いた。

参加チームはバレー男子が十三、女子が五、バスケット男子が十、女子が四、卓球(団体戦のみ)が五ですべてトーナメント戦。

各種目の決勝戦の結果は次の通り。

種目	男子	女子
バレーボール	6区 2-0	6区 2-0
バスケットボール	6区 69-66	6区 33-13
卓球	10区 3-0	7区 7-5

燃えるゴミと燃えないゴミは分別して出して下さい

西原中卓球男子

県代表で九州大会と全国大会へ

中学校卓球の九州大会と全国大会に選ばれた西原中学校の選手八名が、会の男子団体戦で沖縄県代表に選



松田校長ほか4名の学校関係者に引率されて町長を訪れた西原中学校卓球選手8名

八月三日、町長室を訪れ、出発を前にして宮平町長に大会出場の際の報告をした。監督の棚原正栄先生(理科担当)は「生徒達は、まじめで練習熱心、学業も良いと言った。『日頃の練習とは生徒の実力が充分で指導していききたい。』と意欲満々だった。町長も生徒達とにぎやかな会話を笑顔で絶えずご満悦。九州大会が熊本県小国町で八月五日・六日、全国大会が青森市で八月十六日から十九日まで。

家庭での役割分担を決める

お年寄りに生きがい

—そのおばあちゃん、毎朝掃除をすることが、家庭の中での自分の役割と考え、何よりの生きがいと感じていました。

ところが、ある日お嫁さんが「期でネコの手も借りたいほどの忙しうとき、その家の老人は何かの役に立ちたいと田んぼに出て行ったのですが、『邪魔になるから引っ込んでいて』といわれ、明るくでしませんでした。それが、また掃除、自殺を試みたということでした。

「何もしないで、ジツとしていれたいのよ」という言葉が、お年寄りにとって残酷な言葉はあります。お年寄りに生きがいを、つまるところは役に立つ存在であるという自信と、自分のことは自分でやれるという自信が、日々お年寄りの心の張り、生きるバネになっているのです。

家庭では、お年寄りの役割分担をみんなで考えましょう。お年寄りは自分の役割を通して、家族との接点をもち、生きがいを見いだしていくのです。

広報おわび訂正

広報にしはら第九七号の二面(町婦人主張大会)の記事で発表者の呉屋定子さん(高年期の出産をさけよう、十六区)が抜けておりましたので訂正しておわび申し上げます。

【ソフトボール】
13区 4-1 11区
15区 8-0 12区 A

少年野球中央大会

我謝チーム初のベスト8

七月二十九日から沖縄市営球場で開幕した第十四回沖縄県少年野球中央大会で本町の我謝チームが

七月十四日と十五日にスポーツ少年団の野球、ソフトボール大会が西原中グラウンドで開かれ、野球が十六チーム、ソフトボール(女子)が七チーム参加し賑わった。

決勝戦は次の通り。

【野球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

字小橋川三六番地の大城政吉さん(元助役 六十四才)は、七月二日町長室を訪れ、六月に亡くなられた父・大城権さん(八十四才)の香典返しとして町社会福祉協議会、町育英会、町老人クラブなどに合わせて二十五万円を寄付されましたので、この紙面をかりて感謝申し上げます。

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】

【野 球】

【ソフトボール】